The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Shirley Dex, "Women's Occupational Mobility : A Lifetime Perspective", Macmillan, 1987
Author(s)	田中, 重人
Citation	年報人間科学. 1994, 15, p. 175-178
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Shirley Dex

Women's Occupational Mobility: A Lifetime Perspective

Macmillan, 1987

田中　重人

一九八〇年、イギリス雇用省は、イギリス全国の十六～五九才の女性およそ五千人を対象にして、職業経験に関する調査（Women and Employment Survey: WESと略称する）を行なった。調査の中心をなしているのは、学校を卒業してから調査時点までの間に就いた全ての職業について仕事の内容や役職、在職期間などを尋ねた質問項目である。このような職業経歴データを全国の女性を対象にして集めた調査は、イギリスではこれがはじめてのものだ。この調査によってやっと、女性の一生を通じての職業経験を全国規模で分析するための条件が整ったことになる。

これから紹介するのは、このWESのデータを使って現代イギリス女性と職業とのかかわりについて研究した本である。この本の扱う問題は、非常に広い範囲にわたっている。例をあげると、

- 職業の種類と性別との間には強い関連がある（ある職業では女性が大半を占めているのに別の職業では女性の割合が非常に少ない、というような）ことが指摘されているが、この関連は実際にはどんな形をとっているだろうか。
- 「階級」の分析において女性をどのように位置づけるべきか、という問題。――従来の研究は女性の階級的地位を夫の地位で代用してきたが、この手法は今日のイギリス社会を分析する道具としては不適切なものである。職業経歴データを活用することで、従来のものに代わる新しい分析手法を開拓できるのではないだろうか。
- 学歴は職業経歴にどのような影響を与えるかという問題。

●女性の職業と夫の社会経済的地位の間にはどのような関係があるかという問題。

といった具合だ。女性の職業に関する諸問題をとりあげて調査データを例示しながら概説した本、というのがこの本の性格を最もよく言い表わしている表現だと思う。

いろいろな問題を広く浅くとりあげた本だけれども、まったくバラバラのことを書き並べているわけではなく、全篇を貫く何本かの主題がある。それらの全部をとりあげたのでは、とてもこの書評の枠に納まらないので、私にとって最も魅力的だった主題ひとつだけに話を絞ることにしよう。それは、「女性の労働市場はどんな構造を持っているか」という主題である。

＊　＊　＊

著者の議論は、次の認識から出発している。

●労働市場は、いくつかの部門に分割されている。
●部門どうしの間には、賃金や労働条件の格差がある。
●どの労働者がどの部門に所属するかという割り当ては、労働者の能力や属性によって決まる。この割り当ては、労働市場が労働者に一方的に押しつけるものなので、労働者自身がこれの決定に関与することはできない。したがって、労働者にはある部門から別の部門へ移動する自由がない。

これは、一九六〇年代以降アメリカの労働経済学界を中心に発展してきた二重労働市場論 dual labour market theory の枠組を借用したものだ。二重労働市場論というのは、労働市場における不平等を説明することに強く志向している理論である。そのなかにはさまざまの変種があるが、それらのすべてに共通しているのが右に掲げた三つの認識だ。なお、二重労働市場論の変種のなかには三重以上の複雑な市場構造を扱うものもある（この本が展開していくのは、まさにその種の議論だ）が、その場合でも「二重労働市場論」の名前で呼ぶのが通例である。

二重労働市場論を女性の労働に適用する場合、男女間に労働市場の分割があるので女性は男性に比べて不利な部門に押し込められてしまう、と論じられるのが常だった。著者もこの立場から出発しているのだが、さらに進んで女性の労働市場の構造はもっと複雑なのではないかと考え、その具体的な形をデータから取り出そうと試みた。

WESデータの分析から著者が導き出した結論は、現代イギリスの女性の労働市場は五つの部門に分割されている、というものだ。

●最もはっきりした一部門を形成しているのは、教師と専門職のグループである。この部門は階層構造の最上位にあって、高賃金と安定性とを享受している。また、この部門と他の部門の間には、労働移動はほとんどない。

●労働市場の残りの部分では、労働移動がかなり激しい。そのため、一見したところ労働市場の分割が生じていないかのようにみえる。しかし、実際には労働市場の分割は確かに存在するのであって、

。看護婦、事務職その他の中間ホワイトカラー
。熟練労働
。非熟練フルタイム労働
。非熟練パートタイム労働

という四つの部門を取り出すことができる。

労働市場が分割されているにもかかわらず流動性が高いのは、育児の負担のためにフルタイム労働を続けられなくなって「非熟練パートタイム」の職業に転職する、という種類の移動が多いためである。もちろん、子供が成長すれば、育児の負担が軽くなるので元の部門に戻ることができるが、そのような移動はそれほど多くない。一旦「非熟練パートタイム」部門に移動した人が元の職業に戻ろうとするときには、それを阻む力がはたらいているようである。

育児負担に起因するこの一連の移動は、労働者の能力（この場合は労働に投入できる時間）が変化したために当該労働者への部門割り当てが変化したものだ、と解釈することができる。彼女は労働市場の構造によって、強制的に移動させられたのである。これは、一つの部門のなかで労働者が自発的に転職する場合とは異なる種類の労働移動だ。

女性と労働市場とのかかわりを解明する鍵は育児とパートタイム労働だ、ということは以前から指摘されているけれども、これらを女性の一生の職業経験の中にうまく位置づけて説明することには誰も成功していない。著者の分析の最大の成果は、二重労働市場論における部門間移動の概念を使ってこの問題を解く、という可能性を開いたことにある。

しかし、著者の結論をそのまま受け入れるわけにはいかない。というのは、この結論を導き出したデータ分析の過程に次の三つの問題点があるからだ。

(1)この結論は、職業経歴データがカバーする期間、およそ一九四〇～八〇年の全体を暗黙のうちに対象としている（と私は受け取った）。しかし、この期間内に労働市場の構造がずっと同じだったという保証はない。もっと短い期間に限定したときでも結論どおりの構造が見いだせるかどうか確かめてみるべきだ。

(2)著者が分析の対象にしている労働移動には、経済構造の変動によるものがかなり混じっているはずだ。これを取り除いたうえで労働移動のパタンを分析することができれば、労働市場の構造をより精密に描き出せるだろう。

(3)著者は、右の五部門の境界を求める際に、

。職業を（先入見および職業データ分析の慣習にしたがって）十二個のカテゴリーにあらかじめ分けておいて、

。それらのカテゴリーを五群に統合する

という手続きをとっている。最初に決めた十二カテゴリーの間でしか部門の境界線を引けないので、もしこのカテゴリー分けが不適切なものだったとしたら、部門境界を設定すること自体が無意味なものになってしまう。だから、最初の十二個のカテゴリーの分けかたが適切なものだったかどうかが問題だ。

この疑問に答えるためには、職業の分類基準をさまざまに変えて分析しなおしてみるという地道な作業が必要だと思う。

「女性の職業に関する諸問題を広く浅くとりあげる」というこの本の性格からすれば、労働市場の構造に関する問題を深く追究せずに問題点を未解決のまま放置したのは、やむを得ないことだったかもしれない。右の問題点を克服した研究が今後出てくることを、私は期待している。

＊　＊　＊

この本は六つの章からなっているが、第一章はごく短い（四ページ）導入部なので、実質的には五章構成である。このうち、二章および三章前半は先行研究の紹介にあてられている。実際のデータを分析するのは三章後半と四章と五章であり、それぞれ職業間の水平移動、職業間の垂直移動、産業間の移動を扱っている。つづく六章でそれまでの分析結果を総合して、現代イギリス女性の労働移動について著者なりの見取り図が描かれる。

女性の職業に関する諸問題についての概説書という趣が強い本なので、さまざまな問題に関する分析や考察が、散発的に各章のあちこちにちりばめてある。六章にまとめが書いてあるから、そこを読めば本全体の論理の筋道を整理してつかむことができるのだが、一章から順番にしたがって読み進めているときには、いま読んでいる部分が全体の中でどういう位置づけにあるのか、ということがわからなくなってしまう箇所が多い。この本を読むときは、まず六章を読んで本全体のあらすじをつかんでからあらためて二章以下を読みなおす、というやりかたをおすすめする。

この本のもうひとつの特徴は、表を大量に載せていることだ。本の長さは一三〇ページでその中に三六個の表があるから、およそ四ページにひとつの割合で表が出てくることになる。それに加えて、表の中の数字の解釈を本文中で延々とやっていることが多く、特にデータを分析している箇所では、大半のページがその手の記述で埋まっている。おそらく著者は、特定の仮説を立ててそれを検証する形にもっていくのではなく、データの持つ細かな情報を大切にしていわば「データに語らせる」方針で書いたのだろうが、そのことが、全体に散漫だという印象を与える結果を招いている。「数字の洪水」タイプの文章に不慣れな人は、全体の流れを見失わないように注意して読み進めていただきたい。